
エゴン・シーレ作品における現存しない絵画《孤独な修道士》の一考察

エゴン・シーレが28年の生涯の中で約3000点もの作品を残していることは周知のとおりである。しかし彼が強い意志で制作しながらも、未完に終わった現存しない作品があることについて注目されることは、日本では現在までほぼ無きに等しい。さらにそれらの作品が研究対象にされることはなかった現状がある。現存しない作品を研究することは知られざる一面が明らかになる可能性があり、シーレ研究発展の為に大変意義のあることだと思われる。

シーレの友人で美術史家でもあったオットー・ベネッシュ(以下オットー)は、1966年に「もはや現存しないエゴン・シーレ作品の回想」という寄稿文を公表している。そこで彼は現存しない4点の大作《孤独な修道士》《三人の母親達》《回心》《出会い》を見る貴重な機会を得たことを述べ、それらの作品を後世に伝える為に描写しているのである。幸運なことに《出会い》は写真が残され、《回心》は簡易的ではあるものの所有者であったB.F.ドルビンによりスケッチが残されているが、残念ながら残る2作品を図に記録したものは現存しない。それゆえオットーの寄稿文が第一資料となるだろう。

今回は1911年作《孤独な修道士》を研究対象とする。なぜならば、同作は未完成ながらもオットー親子を感動させるほどの名作であったこと、代表作の一つである《隠者たち》とほぼ同じ大きさであったことから、シーレにとり重要な作品であった可能性があると考えられるのである。そして発表者は世界でも初めての試みとして簡易的ではあるが《孤独な修道士》をオットーの証言を元に図に再現した。それにより興味深いことには、先行研究でも指摘されているように、この作品がウィーンともゆかりの深かったフェルディナンド・ホドラーの影響を受けた可能性があるということである。

また、1913年《二本の木のある川の風景画》も、ホドラー作品から影響を受けていると考えられている。私見によるがこの作品は構図的にも絵の印象からも、オットーによる《孤独な修道士》の面影を継承していると考えられるのである。描かれたモチーフが修道士から二本の添木へと変わった理由としては、1901年にウィーン分離派展でセンセーションを巻き起こしたホドラー作《選ばれし者》に描かれた枯れ木からの影響があったのではないかと推測できる。ホドラー作には、少年の願いを聞いた天使たちにより枯れ木が蘇生されることが約束される場面が描かれているが、それはおそらくシーレに多大なる影響を与え、それゆえシーレは1911年から1913年にかけて、約10点もの添木のある風景を描き、彼の死生観である死と復活を表現したのではないかとと思われる。以上のことから、《孤独な修道士》は《二本の木のある川の風景画》へと変じていったのではないだろうか結論づける。